

さいたま市大宮

防災のあり方考える

大宮駅GCSフォーラム

埼玉大研究機構レジリエ



ト社会研究センターとさいたま市は21日、同市の浦和コミュニティセンターで、「大宮駅グランドセントラルステーション化構想を『防災』の視点から考える」をテーマに、「彩の国」市民科学オープンフォーラムを開催した。清水勇人市長や構想策定に関わった同センターの久保田尚教授らが講演し、市民ら約2300人の参加者とともに大宮駅周

辺の開発と防災のあり方について考えた。

センター長の睦好宏史教授は、同センターがハードとソフトの両面から災害に強くなり、いち早く復旧するレジリエント社会の構築を研究していることを紹介し、「フォーラムがさいたま市の発展に役立つことを祈念する」とあいさつした。写真。

市が2日に策定した大宮駅グランドセントラルステーション化構想の内容を報告した清水市長は、「駅周辺の高度利用、新たな東西通路の整備、乗り換え改善を含む駅機能の

高度化、周辺街区との適切な接続により、東口と西口の一体性を高めながら、多様な地域資源のポテンシャルを空間的・機能的に最大限活用していく」と話した。防災に関しては、民間開発街区が連携して地域エネルギーシステムを導入することで、環境負荷を低減するとともに、防災対応機能を強化して「大宮セーフティバックアップシティ」を目指すなどとした。

大宮グランドセントラルステーション推進会議の基盤整備推進部会長を務める久保田尚教授は、「高いビルを建てれば、ビルの床面積に比べて車が増える。渋滞している旧中山道がどうなるかは非常に大きなこと」と指摘し、再開発によって需要が高まる道路交通への対応を最も大きな課題に挙げた。対応策として、外縁部に設けたフリッジ(集約)駐車場からシャトルバスに乗って駅周辺部にアクセスすることで自動車の流入を抑えることや、旧中山道、駅東西を結ぶ中央通のアンダーパス化が検討されていることを紹介し、「かなり大胆で大規模なインフラ整備を行う必要がある」と話した。